

# フランツ・ボアズ

——その歴史の概念について——

堀 喜 望

- 一、序説——課題。
- 二、ボアズの生涯 1——十九世紀の人類學。(以上本號)
- 三、同 右 2——アメリカ・インド人の批判的調査。
- 四、同 右 3——歴史的認識の批判的方法の理論。一般的方法的問題。
- 五、方法——「批判」の概念。
- 六、「歴史」の概念——その個別性と一般性。
- 七、歴史的規則性——心理學的と歴史的。
- 八、心理學的方法——文化の動態的關聯。その法則的意義。

## 一

フランツ・ボアズは、彼の殆んど晩年に近い一九三六年に書かれた一論文において、自己の立場を回顧して次の如くに語つてゐる——「私が『古い思辨的な理論』と闘つた初期の敍説——私は現在も尙ほ、われわれの文化から引き出した範疇を、見知らぬ他の諸文化に押しつけることに基く新しい思辨的理論と闘つてゐるのであるが——の中には、私は文化變容 (acculturation) と傳播 (diffusion) の研究の必要(一八九五)を強調した……このやうな歴史的な方法が既に鞏固に建設されたと考へたとき、私は、略、一九一〇年頃、文化動態、文化の統合、及び個人と社會と

の間の相關作用、の問題を強調し初めたのである。<sup>7)</sup> このボアズ自身の證言は、彼の一世紀に近い長い生涯と、その多方面にわたる複雑な思想・業蹟とに對して、全體としての、理解を與へるために、われわれにとつて極めて示唆的であるといはねばならない。

ボアズがアメリカ人類學に独自の基礎を置き、今日のその繁榮を築き上げたことは既に周知知られるところである。ボアズ學派は、二十世紀のアメリカ人類學において多方面の業蹟を生み、アメリカ原住民の具體的・科學的な資料を確立すると共に、その方法上並びに理論上の新しい發展に寄與するものであつた。サビアー、ゴールデンワイザー、ローヴィー、ラディンなど、ボアズの門下として、彼の問題をアメリカ原住民の夫々の領域に發展させ、ディクソン、ウイスラー、クローバーなどの研究もそれをめぐつて展開されてゐる。今世紀の最初の二十年代は、人類學における批判的な歴史的研究に關して、實にボアズの世紀といふことができる。

しかし、ボアズの問題はまたベネディクト、ハースコヴィツなどの文化研究を通して、人類學の新しい世代の轉換に深い繋りをもつてゐることを、われわれは見逃してはならない。ベネディクトは、部族の個別的な歴史的研究を基礎としながら、異質的な諸文化を夫々の統合的な行動様式の型に從つて比較特色づけを試み、歴史的な文化が内面的に統合される傾向、價值的に綜合された文化の範型的形態を浮き彫りにし、このやうにして歴史的文化的統體性を心理的な關聯で取り上げる道を拓いた。<sup>8)</sup> このやうに文化的要素の單に外面的な結合を辿るのではなくて、その内面的統合の機能と動態、並びに文化的態度との關聯を明かにし、文化を人間存在との相關性の中で理解することは、今日の人類學における新たな中心的課題となつてゐる。更にそれは、リントンなどにより人格心理學の研究と結びつけられ、人類學の領域に實證的・理論的な視野を擴張した。かくて文化は、それを受容し運営する個人の過程との相關に從つて動態的に把握され、人類學の研究は「文化と人格」といふ一般的な課題に基礎を與へるものとなる。今日の人類學が所謂「人間關係の科學」において中心的な位置を占めるに至つた所以は、人類學のこのやうな發展を通してであ

つた。三四十年代以降の人類學は、かかる課題をめぐつて謂はば新しい世代に替はれ、今日の繁榮を経験しつつあるのである。

このやうな動向が今日の人類學における大きな轉換となつてゐることは、いふまでもないことである。そしてそれが、從來の地域的に限定された歴史的探求を克服して、人間の關係の廣い視野の中に自らの方向を見出さうとする人類學の自覺的發展であるといふのも、認められなければならないであらう。それは、謂はばアメリカ・インド人といふ人類學的フロンティアの終焉を意味し、新たな人間の視野が開示されてきた姿ともいふことができる。しかしこのやうな轉換がボアズにおける「より多くの事實とより少い理論」の歴史主義の否定において成立したと解するならば、それは尠くとも彼自身の理論と課題とを正しく把へるものではないといふべきであらう。われわれは、このやうな問題轉換そのものが、ボアズ自身の語る如く、彼の理論において既に準備され、その方向が示されてゐることを指摘しなければならぬ。それは、ベネディクトやリントン<sup>(5)</sup>を個人的に結びつける單なるボアズの影響といふ如きよりも以上のものである。それは、ボアズの批判的方法によつて取り上げられた文化の集約的・統合的研究の中に既に宿されてゐる見解である。更に文化における個人的變容の問題は、ボアズの文化記述において早くから注目され、文化の動態的考察の基礎が興へられてゐる。われわれはこれらの諸問題を、ボアズの思想の發展において、相互に關聯づけることを課題としなければならぬ。それによつて、われわれはボアズの歴史的方法を文化動態的な理解との關聯において明かにするのみならず、また同時に人類學における歴史的發展の關聯を統一的に理解する道を進むことができるであらう。蓋しボアズの歩んだ途は、實にまたアメリカ人類學そのものの發展の指標であつたからである。

しかしながらこのやうな課題は、われわれにとつては更にボアズの最も初期の、學問的經歷の生ひ立ちに含まれた彼の問題との關聯の下に照し出されるとき、統一的な展望を確立することができるであらう。ボアズの歴史的方法とその文化動態的理解との發展的關聯を貫くところの彼の人類學的課題と批判的態度は、ボアズの學問的形成そのもの

の中に生み出されたものだからである。——然らばそのやうな問題形成は何處に探らるべきであり、そしてまた如何にしてであるか。

われわれは先づボアズの學問的經歷の簡單な考察とその業蹟の檢討から初めなければならぬであらう。

註(1) Franz Boas, "History and Science in Anthropology: A Reply", *American Anthropologist*, vol. 38, 1936. (in his *Race, Language and Culture*, 1949, p. 311)

ボアズの研究は、體質人類學から言語・文化の廣い領域にわたつた個別的な特殊問題について展開され、多數の個別的論文の中に發表されてゐる。そしてその見解には時代的な發展があり、またローゼンターの指摘する如く、互ひに矛盾するものを含み、その総合的な理解を著しく困難ならしめてゐる。しかしそれは、ボアズの學問的態度と密接に結びついてゐる事情で、決して單なる偶然ではない。即ち殊殊的な問題を一氣に一般化することをせず、民族的文化においてそれが絶滅しないうちに生ずる事實を正確にしておかうとする、科學的・實證的な研究方法に照應するものである。

これらの業蹟のうち主要なるものは、一九四〇年に發行された上掲の書物に収録されてゐる。それによつてわれわれは、ボアズの比較的古い、われわれの眼に觸れ得なかつた論究にも接することを得、ボアズの思想の發展を直接に見ることができ、われわれの小論は、従つて専らこの書物の中の諸論文を基礎として考察されたものである。この書物において、われわれが本稿の以下に引用した諸論文を、便宜のためボアズによる發表の年代に従つて豫め掲げておく。

1887. *The Study of Geography*, *Science*, vol. 9.

1888. *The Aims of Ethnology*, Lecture given before the *Deutscher (essig)-Wissenschaftlicher Verein von New York*, March 8, 1888.

1891. *Dissemination of Tales among the Natives of North America*, *Journal of American Folk-Lore*, vol. 4.

1895. *The Growth of Indian Mythologies*, *ibid.* vol. 9.

1896. *The Limitations of the Comparative Method of Anthropology*, *Science* vol. 4.

1898. Introduction to James Felt, "The Traditions of the Thompson Indians of British Columbia", *Honors of the American Folk-Lore Society*, vol. 6.

1898a. *Advances in Methods of Teaching Science*, vol. 9, 1899.

1902. The Ethnological Significance of Esoteric Doctrines, *Science*, vol. 16.
1903. The Decorative Art of the North American Indians, *The Popular Science Monthly*.
1904. The Folk-Lore of the Eskimo, *Journal of American Folk-Lore*, vol. 17.
1908. The Decorative Designs of Alaskan Noctuides, *Proceedings of the U. S. National Museum*, vol. 34.
1911. Review of (Traubner, "Methode der Ethnologie"), *Science*, vol. 34.
- 1914a. The History of the American Race, *Annals of the New York Academy of Sciences*, vol. 21, 1912.
1914. Mythology and Folk-Tales of the North American Indians, *Journal of American Folk-Lore*, vol. 27.
1915. Modern Populations of America, *Proceedings of the 19th International Congress of Americanists*.
1916. Representative Art of Primitive People, *Holmes Anniversary Volume*.
- 1916a. The Development of Folk-Tales and Myth, *The Scientific Monthly*, vol. 3.
1920. The Methods of Ethnology, *American Anthropologist*, vol. 22.
1924. Evolution of Diffusion, *ibid.*, vol. 26.
1925. Stylistic Aspects of Primitive Literature, *Journal of American Folk-Lore*, vol. 38.
1930. Some Problems of Methodology in the Social Sciences, *The New Social Science*, ed. by L. D. White.
1932. The Aims of Anthropological Research, *Science*, vol. 76.
1936. The Relations between physical and Social Anthropology, *Essays in Anthropology in Honor of Alfred Louis Kroeber*.
- 1936b. History and Science in Anthropology: A Reply, *American Anthropologist*, vol. 38.

これらの個別的研究を基礎としたボアズの全體的見解は、一九一一年に出版された『The Mind of Primitive Man』に略々盡されてゐる。この書は、その後一九三九年に改訂され今日にまで版を重ねてをり、従つてボアズの完成期以來の大體變りのない、決定的な繼承的見地を表現してゐるものと見て間違ひない。われわれは、それ故にこれらの書物をボアズの見解の基礎に豫想しつつ、その成立と形成發展された諸過程を、上述の諸論文の關聯の中に追究するといふ道をとるべあらう。そしてこのやうな論究において、ボアズの全體的見解の理解にとつて、ボアズと親近のローザンビー並びにコールデンライザの下記の要約は、矢張り屬的な敘述を含んでゐる。

R. H. Lowie, *The History of Ethnological Theory*, 1937, pp. 138-155.

A. A. Goldenweiser, *Leading Contributions of Anthropology to Social Theory*, in *Contemporary Social Theory*, ed. by H. E. Barnes, etc, 1940, pp. 461sq.

特に前者がホアズの個別的な意見に對して細かい批判を示しつつ、その全體の見解に對する正確な見透しを與へてをり、後者がホアズの問題、規定とその展開を廣い視野から位置づけられてゐることは、何れも具體的な問題に對する深い接觸と理解なつては及び得ぬものさへひびく。本稿におけるホアズの理解にとつて、多くの示唆を負つてゐることを附記しておく。

註(二) A. A. Goldenweiser, *Recent Trends in American Anthropology*, *American Anthropologist*, vol. 43, 1941.

註(三) Ruth Benedict, *Patterns of Culture*, 1934.

(四) Ralph Linton, *The Study of Man*, 1936.

(五) Cf. John Gillin, *The Ways of Men*, *An Introduction to Anthropology*, 1948, p. 607.

## 11

ホアズ (Franz Boas, 1858-1942) は、十九世紀の後半、人類學の初期の目覺しい發展が人間に關する新しい知見を擴張しつつ、人類文化に對する総合的な理論・假説を互ひに就ひ合つた時代の中に、その學問的生涯を初めた。

ハイデルベルヒとボンで物理學と地理學を學んだこの少壯の學徒は、地理學的な關心から出發して人類學の問題に接近し、一八八五年にはベルリンの民族博物館の助手として、バステイアン、フィルヒョーの薫陶に接するに至つた。

バステイアンは、當時ドイツの人類學界において最高の權威であつた。周知の如く彼によれば、人類學の課題は、人間の普遍的な心理學的法則に基つて、人類の普遍的歴史の法則を發見することにあつた。人間本性の心的統一は人類文化の至る所において、所謂「原基的思想」たる共通の精神的形態を形成する。そしてこのやうな精神は、様々な「地理的地方」において特定な刺戟の下で、個別的民族的な「民族思想」に形成される。これに對して人文地理學の

ラッツェルは、このやうな地理的領域にわたる特殊な文化形態の空間的分布について、人類の移動と文化傳播によつてこれを説明した。ラッツェルによれば、文化は生活環境の發展の頂點をなすものであり、従つてまた地理と風土は、文化の中にその終極の表現をもつといはれる。このやうにして彼は、その「民族學」(Völkerverwandtschaft)の中で流動する諸民族の地理的に整頓された文化の記述を興へてゐるが、それらの類同的關係は人類の移住―傳播の原理によつて基礎づけられた。彼にとつては、人類文化は地球上の一つの中心から傳播的に發展したものであり、かかる過程を辿ることによつて民族學は歴史學にまで成長しなければならず、従つてその目標は人類の歴史であつた。このやうな地理的に制約された文化の傳播の發展の構想が、グレープナーやアンカーマンなどによるドイツの所謂文化圈理論に發展繼承されたことは周知のところである。

これに對してバステイアンの中心的關心は、人類の普遍的な心理の法則に基く文化の一般的发展の解明にあつた。彼にあつては文化の接觸・傳播の事實を否定するものではないが、このやうな特定の個別的變化は上述の基本的法則に比すればどこまでも從屬的たるに過ぎず、そしてまた個々の場合における具體的な證據によつて基礎づけられなければならないとしてゐる。地理學者として出發したボアズが、文化の分布・傳播に關して嚴しい批判的態度を保持し得たのも、バステイアンのかかる見解に深く影響されてゐるのを認めても誤りではないであらう。このやうな批判的迂路を通して、地理的傳播の方法がボアズの人類學的研究の領域に再び取り上げられ、平行論的進化の假説に對する批判的原理となつたことは、更に後に明かにされるであらう。それは兎も角、ベルリンにおいてバステイアンの接觸によつて發足したボアズの學問的生涯が、ここにドイツの正統的な人類學の流れの中に彼を汲み入れるものであつたことが指摘され得るであらう。

十九世紀の七・八十年代のドイツは新興の自由な空氣に満ちてゐた。バステイアン、ラッツェルなどの廣汎な體系や多様な理論的問題の潑刺と展開されてゐる學問的風土の中にあつて、若きボアズが自ら選び取つたこの學問的な位

置と方向は、彼の全生涯の發展の上に重大な役割を果してゐるといふべく、ボアズの見解の全體的な理解によつて、われわれの先づ第一に注意しなければならぬところであらう。

しかしボアズのこのやうな方向を決定的たらしめた現實的契機としては、一八八三—一八八四年にわたる彼のバツフィン・ランダの極地エスキモー部族の實地調査が擧げられなければならない。この地方の様々の部族の風習・傳承の多樣性に觸れることによつて、ボアズ自らの語る如く、人間文化に對する地理的・環境的な條件の決定的制約に關する「迷蒙」が目覺めしめられた。それは文化の創造的條件をなすものではなく、單にこれを制約し修飾變容する條件に過ぎぬことが明かとなつた。このやうにしてボアズは、地理學的立場からバステイアンの人類學に結びつくに至つたのである。一八八五年に書かれた「中部エスキモー」の細目的研究によつて、これらの文化が歴史的生成の結果であり、従つて人類史の普遍的發展がその比較を通じて明かにされるといふ確信に到達してゐる。かくの如くにしてこの調査旅行は、ボアズの研究にとつて殆んど決定的ともいふべきものであつた。それは、彼の地理學の見地を人類學の中心的課題の中に發展せしめたと共に、更に將來ボアズをアメリカの地に結びつける機縁となるものであつた。そしてこのやうな轉機が、ボアズにおいては具體的な民族の調査研究を契機にしてゐることもまた、見逃してはならないであらう。ボアズの見解が常に事實の綿密な實證的な認識によつて檢證され、かかる具體的な事實がまた、彼の批判的認識の反省された方法によつて統制されてゐるところに、實はボアズの研究の科學的な態度が一貫してあらはれてゐるからである。

このやうな意味において、ボアズのバステイアンとの接觸は、彼の人類學的研究の發足と發展とに對して、一つの方向線を與へたものといふことができる。當時において民族文化の理解にとつては、様々の問題が解決を求めて錯綜してゐた。——所謂文化の獨立的起源と接觸・傳播の問題、地理的環境の文化的決定に關する問題、人間精神の普遍的法則に對する心理的要因と特殊的な文化の歴史的要因、等の諸問題が、ボアズの人類學的研究において檢證・解決



さるべき課題として取り上げられねばならなかつた。そしてこれらの問題は、當時にあつては人類の普遍的歴史の法則の發見といふ方向に従つて提起されたことは、既に周知の如くである。ボアズもまたこれを自己の課題として、その人類學において繼承してゐる。このやうな問題を、實證的な檢證を通じて批判的に發展させることが、實はボアズの學問的經歷を導くものであるといふことができる。即ちボアズにおいて、その様々の文化的領域にわたる綿密な實證的認識は、かかる理論的課題によつて導かれると同時に、逆に前者の檢證を通じてその理論が批判的に展開されるのである。このやうにして人類史的法則の理念は、ボアズの研究における出發點をなしたばかりでなく、その生涯の發展の導きの糸となることが認められる。それは、ボアズの理論的・實證的な研究を相互に關聯せしめ、彼の「思辨的理論」に對する鬭争といふ一貫した態度を基礎として形成された、といふべきであらう。

かくの如くにしてわれわれは、ボアズにおいて強い理論的志向と人類史の理念とが、深くその見解を支持してゐることを指摘しなければならぬ。そしてこれは、彼をつなぐバステイアンなどのヨーロッパ人類學との接觸の中にその由來を辿ることが出来る。このやうな事情はまた、一八八六年英領コロムビアの調査に關聯して、彼がタイラーとの接近の機會をもつた事實によつても覗ひ得るであらう。それは、當時既に彼自身の獨自の専門的領域を開拓しつつある若いボアズが、ヨーロッパの支配的な學問的潮流の中にその身を置いてゐることを物語つてゐる。われわれは、若い生長しつつある精神が、このやうな精神的風土から無縁であつたなどと考へることはできない。してみればボアズの學問的發展は、かかる問題を批判的に検討し、その理論を「思辨的」内容から解放して、その本來の基礎の上に獨自の方向を與へることに依りて積み上げられたものに他ならない。このやうな意味でボアズの業績が、ドイツ的な頭腦にふさはしい、理論的・科學的な探求であつたといふことは、許されぬことではないであらう。

しかしながらボアズの貢獻について、ひとは、彼が人間精神の發展法則の圖式を否定して、専ら實證的な個別性の歴史的認識に集中した點を強調するでもあらう。ボアズの業績が、特定の地域的領域に限定された文化の細目的研究に

あり、個別的な文化的特色の實證的な分布調査を基礎として、具體的な文化の歴史的接觸變動を證明することにあつたのは、誰しも認めるところである。しかし若し彼の批判的研究を、ただこのやうに否定的・消極的のみ解するならば、ボアズの個々の研究における努力を見喪ふのみならず、彼の見解を全體として理解する所以ではないであらう。ボアズの多方面にわたる實證的な個別研究は、どこまでも彼の理論的課題の檢證として展開され、これによつて方向づけられてゐると共に、かかる個別的認識は、認識の操作的方法の理論的反省としてこれに關係してゐる。ボアズによつて開拓された様々の民族調査の新しい方法と、文化理解に關する新しい問題提起とは、實にかかる理論的關聯に従つて成し就げられたといふべく、そしてその導きとなつたものが人間の普遍的理念に他ならないのである。われわれにとつてはそれ故に、ボアズのかかる理論的見解の展開を、彼の業績において具體的に明かにすることが、われわれの課題でなければならぬ。しかし今差し當つて見られたところは、ボアズの理論的志向と人類學的課題の方向が、彼の學問的經歷の端初の中に深く由來するといふことであつた。——そしてこのやうな課題が新たに展開され、その檢證の地盤が提供されて、その研究の發展に機縁を與へたものはボアズの新大陸アメリカへの移住であつたのである。

(未完)

註(1) "The Central Eskimo", 6th Annual Report of the Bureau of American Ethnology, 1888.

(筆者 神戸大學文理學部〔社會學〕助教)